



当院における女性若年がん患者の生殖機能温存の選択肢が広がります

～ 卵巣組織凍結と卵子凍結(未受精卵子)が可能になりました～

2019年8月27日付けで、日本産婦人科学会より「医学的適応による未受精卵子、胚(受精卵)および卵巣組織の凍結・保存に関する登録」が承認されました。これにより、当院にて**未婚の女性若年がん患者の生殖機能温存が可能**になりました。

※従来は生殖機能温存を希望する男性がん患者(射精もしくは手術で精子回収)と既婚女性がん患者(受精卵凍結)のみが対象。

◆若年がん患者(0歳～39歳)の推定年間罹患数の現状

日本国内において、年間22,000人あまりの若年者(0～39歳)が、がん罹患しています。

内訳は男性が約8,000人、女性が約14,000人です。そのなかでも15歳から39歳の思春期・若年成人(Adolescent and Young Adult, AYA)の患者さんは9割を占めています。また、**AYA世代患者さんの多くが、「不妊治療や生殖機能に関する問題」について悩み**を持っています。

◆若年がん患者生殖機能温存の現状

がん治療のための、化学療法、放射線療法やホルモン療法により生殖機能が低下または喪失する可能性があるため、これまでも生殖機能温存が行われてきました。しかしながら、**女性若年がん患者においては、既婚者のみを対象**としており、**未婚の女性若年がん患者(AYA世代に多い)は生殖機能温存をすることができませんでした**。※**男性若年がん患者は射精もしくは手術で生殖機能温存をすることができていました**。

◆今回、公益社団法人 日本産婦人科学会の登録施設となったことで、従来の胚凍結(受精させた卵子＝既婚者)に加え、卵巣組織凍結と卵子凍結(未受精卵子)が当院で可能になりました。これにより**未婚者の女性若年患者も生殖機能温存をすることができるようになりました**。

◆当院における、思春期・若年がん患者の生殖機能温存のポイント がん診療面)

- ・日本に393施設あるがん拠点病院の一つで、各領域のがん治療の専門医がいる。
- ・小児・AYA世代がん患者が多く、県西部でがん治療の中心的役割を果たしている。

生殖医療面)

- ・日本産婦人科学会登録生殖補助医療施設の一つで、高度不妊治療が実施できる生殖医学会専門医が複数在籍する不妊内分泌部門を有している。
- ・妊娠した場合にハイリスクとなる可能性があるが、総合周産期母子医療センターとして対応可能である。

施設面)

- ・日本に数少ない、「がん拠点病院でかつ日本産婦人科学会登録生殖補助医療施設」である。
- ・がん領域の専門・認定看護師、不妊症看護認定看護師の両方を有し、カウンセリング体制が整っている。
- ・がん領域専門の薬剤師や臨床心理士などのがん・生殖医療のヘルスケアプロバイダーを有している。

是非、貴社にてご紹介いただければ幸いに存じます。貴紙で取り上げて頂けるようでしたら、

予め下記連絡先までご一報いただけましたら幸いです。よろしく願いいたします。